

## 滋賀県文化情報

### 『えんむすび』

●「旅する画僧・金谷一近江が生んだ奇才」展 関連ワークショップ  
 「たいけんびじゅつかん×草津宿みちくさ工房」ミニチュア屏風をつくろう！

3月から5月まで草津市立草津宿街道交流館で開かれる「旅する画僧・金谷一展」。今回出品される横井金谷の作品「洛東春興図」の修理を行った表具師を講師に迎え、まず展覧会を学芸員の解説で鑑賞した後に、「屏風の仕組みを教わりながら、ミニチュア屏風をつくります。ぜひこの機会に職人の技を体験してみませんか？」

●日時：5月11日（土） 11:30～15:30  
 ●講師：伊藤清人氏（株）陽光堂



作品修理の様子



セッションの様子



会員交流会の様子



古久保憲満氏の作品

※アール・ブリュット…美術の専門的な教育を受けていない人が、伝統や流行などに左右されずに自身の内側から湧きあがる衝動のまま表現した芸術

●アール・ブリュットネットワーク  
 フォーラム2019を開催しました！

2019年2月10日（日）びわ湖大津プリ

- 対象…小・中学生とその保護者
- 定員…15人（要事前申込）
- 材料費…一人500円
- 集合…草津市立草津宿街道交流館
- 申込締切…4月26日（金）
- 問合せ先…滋賀県立近代美術館  
 077-522-2111  
<http://www.shiga-kinbi.jp/>

ンスホテルにてアール・ブリュットネットワークフォーラム2019を開催しました。200名近くの方にご参加いただき、アール・ブリュットについてこれまでを振り返り、これからの展望や福祉現場でのアート活動、国内外で活躍する作家についてみなさんと情報共有することができました。アール・ブリュット作家である古久保憲満氏ご本人からは海外での展覧会や公開制作の様子をお話いただきました。

参加者からは、「来年度もぜひ参加したい」、「作家さん自身のお話がじっくり聞けて良かった」とのお声をいただきました。

## Made in Shiga 「身近に感じる「美」の世界

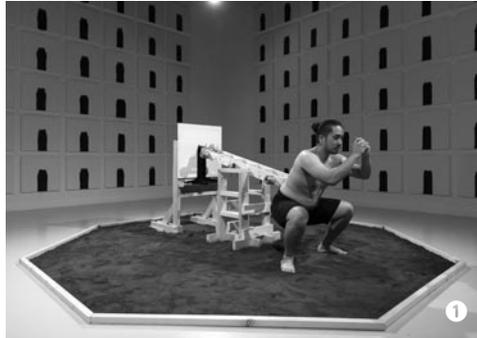
近年に実施された「暮らしアート事業」の中から地域を元気にする主な取り組みを紹介しします。

●いま、あらためて身体を考える  
～playing BODY player～

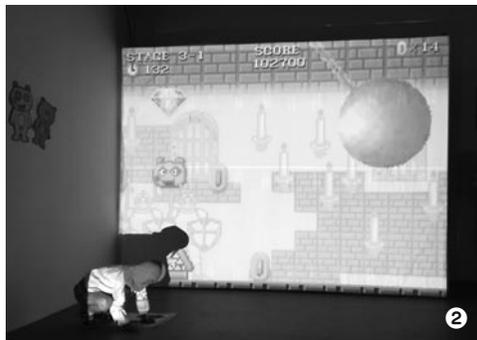
成安造形大学「キャンパスが美術館」 田中 真吾

成安造形大学「キャンパスが美術館」では、2018年10月26日～11月17日の間、「playing BODY player」と題した展覧会を開催しました。

本展覧会は「身体(body)」と「遊び(play)」をテーマに据えることで、近年、美術館などでもトピックとなっている「身体表現作品」



①



②



③

の展示方法についての考察や、また、鑑賞者に表現の多様性に触れてもらう機会として企画されました。

出品いただいたのは身体にまつわる作品を制作している5名の美術作家です。

メインとなる会場では、1点1点に力強い一本線が引かれた102点の絵画が壁一面に展示され、部屋の中にはシーソーのような装置が設置されました①写真①。

作家がその装置を腰に巻き、スクワットを行うことでシーソーが上下し、反対側の先端につけられた刷毛が画面に線を引く、

という構造になっています。会期中、4度に渡り作家がスクワットのパフォーマンスを行いました。とても単調で徒労にも思える作業ですが、実際にスクワットを行なっている作家の身体が上気し、息が上がっていく様子を見ると、こちらも固唾を呑みつつ引き込まれるような熱気に包まれていきます。目の前で一つの身体が運動する、という営為が放つ魅力に気づかせてくれる作品でした。

また、会期中ほぼ毎日会場に足を運んでコンテンポラリーダンスを披露してくれたダンサーや、動物の皮を織り込んで制作された衣服のようなテキスタイルのオブジェ。まるでゲームの中に入ったかのように鑑賞者の動きに合わせて進行する映像作品もありました②写真②。

ある展示室では真っ暗な部屋に作家自身の姿が描かれた鏡が設置され、鑑賞者は手に持ったライトで作家の姿を探るように鑑賞を行いました③写真③。光が鏡から鏡へと乱反射することで部屋全体が万華鏡のような空間となり、その中にいくつも浮かび上がる作家の身体像がとても印象的でした。

このように、多様な素材と技術を用いながら、誰にも共通する「身体」を問い直すことで、表現の原点から新しい可能性を志向することができた展覧会だったと考えています。

## アートのみかた

### — 滋賀県立近代美術館所蔵作品をもとに —



池田遙邨「江州日吉神社」 昭和12(1937)年 絹本着色・二曲屏風一隻 滋賀県立近代美術館所蔵

● 奔放と精緻。ふたつの画風が混在する、詩情豊かな春の風景

滋賀県立近代美術館学芸員 平田 健生

左右から中央に向かって枝を伸ばした山桜があでやかに咲き誇る、絢爛華麗な春の風景です。背後に見えるのは、青々とした水をたたえた琵琶湖と、山のふところに抱かれたおごそかな神域。春の山王祭で有名な日吉大社の境内です。画面の下を流れる川は大宮川、そこにかかる石橋は有名な日吉三橋でしょうか。山や琵琶湖の青、新緑や苔の緑、そして桜の葉や鳥居の赤。鮮やかな色彩がお互いに引き立てあって、華やかで開放感に溢れた画面を作り出しています。よく見ると、遠景の山や湖の描き方は現実のかたちにこだわらず自由奔放に描く「南画風」の描き方、近景にある山桜の花や枝は細部を写實的に描き込む「円山四条派風」の描き方で、まったく異なる二種類の画風がひとつの画面に混在しています。洋画から出発して様々な画法を学び独自に昇華した、「旅の画家」池田遙邨（1895～1988）らしい、大胆な作品です。

# オペラ日和

## ● 名作オペラの愉しみ ヴエルディ作曲 オペラ《リゴレット》公演

びわ湖ホール事業部 チーフプロデューサー  
舘脇 昭

今年6月に、イタリアの名門、ボローニャ歌劇場が世界的スター歌手とともに来日、ヴェルディの《リゴレット》を上演します。びわ湖ホールでの上演は、2011年以来実に8年振り5度目となります。

ヴェルディはオペラ王と称されるイタリアを代表する作曲家です。病気のため妻と子を次々と亡くし、失意のどん底から28歳の若さで発表した「ナブッコ」が大ヒット、79歳で発表した「ファルスタフ」に至るまで生涯に26ものオペラを作曲し、その殆どの作品が今も世界中で上演されているという類まれな作曲家です。

《リゴレット》は、彼が37歳の時の作品、当時としては相当センセーショナルな出来事でした。それまでのオペラでは考えられ



ボローニャ歌劇場内部



ガザーレ



アルベロ



ランカトーレ

ないタイプの中でこぶを持つ宮廷道化師を主人公とし、強い政治色に不道德的な内容、「呪い」が物語を支配するなど、原作者のヴィクトル・ユーゴーでさえオペラ化には反対したといえます。しかし、渾身の自信作「女心の歌」や嵐など自然描写の巧みな音楽と、主人公道化リゴレットの怒り、悲哀、娘への愛情など感情を盛り立てるストーリーが観衆を圧倒。歴史に名を残すイタリヤ・オペラの一大傑作が誕生しました。その後、《イル・トロヴァトーレ》、《椿姫》と、次々と傑作を発表、中期傑作の森3作と呼ばれる作品群を生み出しました。

今回の上演では、リゴレット役には、昨年の

バーリ歌劇場《トロヴァトーレ》での圧倒的な歌唱が記憶に新しいアルベルト・ガザーレ、マンツォア公爵には超高度を得意とし前回のボローニャ歌劇場公演でフロレスの代役を務め見事な成功を取めたセルソ・アルベロ、純愛を貫くジルダには今や世界のプリマとして活躍するデジレ・ランカトーレと、いま《リゴレット》を聴くならこの歌手で聞きたいというスター歌手が揃います。本格的なイタリア・オペラを観る全ての条件が揃った、まさに千載一遇のチャンス、どうぞお見逃しなく。

## ● オペラの楽しみ方

### 豪華ラインナップ、

### びわ湖ホールで愉しむオペラ話題作

2019年度のびわ湖ホールは、《リゴレット》の他にも魅力溢れるオペラ公演が目白押しです。4月には沼尻竜典オペラセレクトション（びわ湖ホール芸術監督沼尻がお客様にぜひ聞いていただきたい作品をお届けするシリーズ）では、生誕120年を迎えるプーランクの《声》を演奏会形式で、7月には世界的指揮者大野和士によるプッチーニの《トゥーランドット》を壮大な規模で、20年1月には、ワルツ王と呼ばれるヨハン・シュトラウスII世の《こうもり》をお正月にピッタリなお目出たい雰囲気でお届けします。そして3月にはワグナーの「ニーベルングの指環」最終話「神々の黄昏」。シリーズ集大成に相応しい、超弩級の大規模舞台をお楽しみいただきます。